

令和2年度 第1回教育課程編成委員会

日 時：令和2年10月23日(金) 20:00～21:00

場 所：長崎医療技術専門学校 会議室

出席者：長尾 博、松本逸郎、西 啓太、有福浩二、大坪 建

分部哲秋、韋 傳春、杉町尚美、荒木一博、岩永隆之、早野和之

欠席者：なし

座長：韋

1. 出席者紹介

2. 校長挨拶

3. 前回会議後の報告

韋) 前回、新型コロナウイルス感染症について話題が挙がったので、「新型コロナウイルス感染予防対策によるカリキュラムへの影響状況」について説明する。

杉町) 前期の行事予定について、当初の予定と感染対策後の結果を資料として準備した。加えて、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について(抜粋)」を資料として添付した通達内容を踏まえて、授業等の対応を行った。

4月開始時は時差登校で対応していたが、緊急事態宣言後の4月22日から休校にした。その間に、本年度から1年生に導入したiPadの使用練習も兼ねて、教員が自宅から配信するオンライン授業を導入した。2・3年生においても各自のスマートフォンに配信し、オンライン授業を導入した。緊急事態宣言解除後は、段階的に分散登校から時差登校、通常登校へと緩めていった。そのため授業がずれ込むことになったが、終了した科目から順に定期試験を入れ込むことで、お盆前までに終了できるように調整した。結果、授業と定期試験が並行して行われる形となった。あわせて進級試験や前期再試験も日程がずれることとなった。

後期開始日についても今後の感染拡大対策強化等を懸念し、1年生を1週間早めため、再試験等が多い学生については夏休みがほとんどない状況であった。

解剖標本見学実習については、長崎大学医学部の立ち入り制限により、学内において非常勤講師の講義、学内演習、グループ発表、定期試験という組み立てで実施した。

大きく影響を受けたのは3年生の臨床実習で、本来8週間を2回行うが、1期目においては実習受け入れの確保が出来ず、前半4週間を学内実習、後半4週間を臨床実習という形をとった。2期目は全員8週間の臨床実習が実施できた。

2年生の臨床実習においては、9月実施(3週間)の実習施設が確保できず、理学療法学科5名については学内実習という形をとった。そのため2年生全体に、学内実習の内容・方法、成績についてなどの説明を行った。1月には4週間の実習を控えているが、実習受け入れ施設の確保についても心配されるところである。

11月に行われる1年生の見学実習(1週間)については、両学科共に受け入れ施設確保でき、実施できそうな状況である。

4. 開 会

韋) 本委員会は第6条の規定により出席人数を満たしており成立していることを確認する。

5. 委員長選出

韋) 委員長は校長の分部となる。

6. 審議事項

1) 今後の臨床実習に代わる学内演習プログラムについて

杉町) 本年は3年生1期目の前半4週間を学内実習とし、教員が交代で講義や演習を行う形式で行った。また、4月の緊急事態宣言で実施できなかった非常勤講師の講義も実施した。

2年生については、実習配置できなかった5名に関しても、教員が指導的役割として各学生に一人ずつ付き、デイリーノートのフィードバック等を行う形で学内実習を行った。演習内容は、評価の練習や講義で組み立てた。

岩永) この5名は、実習に向けた学生と同様に9時から18時までを目途に、準備を含めて臨床と同じように取り組んだ。実際に患者様はいないが、臨床に準じた態度を教員もとり、コミュニケーションや挨拶、評価の見直しを行い、確認試験も適宜取り入れながら、密にかかわった。日々の課題に加え、2週目から模擬症例を取り入れ、評価のとらえ方・解釈の仕方などに取り組んだ。模擬症例には、実際の患者様の動画を用いたり、教員が患者役になったりなど工夫しながら学生に提示した。そういった意味では、濃い3週間となった。また、学内実習のシラバスも作成し、対外的に提示できる資料も準備した。

韋) 実際に行った内容の説明であったが、果たしてこれで良かったのか、また現場に行けなかった学生に対して押さえておいてほしい内容があればご意見いただきたい。

大坪) 今回初めてのパターンで大変苦勞されたと思う。教員や非常勤講師が指導・対応されたようだが、3年生の学内実習に関して非常勤講師がどのような内容でかわられたのかを知りたい。

杉町) 非常勤講師については、本来実習準備のための内容であったため、講義が主で行った。

大坪) 他の養成校から学内演習として計26コマ依頼され、基本動作・排せつ動作・更衣・IADL・事例発表など4コマ×6回を複数名で分担し関わった。講義、動画を利用した説明、グループワークを行い、数症例の中から学生自身が選び事例発表を行い、サポートを行った。感想を聞くと、実習に行くのと違った意味で「よかった」との反応があった。

医技専においても、臨床現場の非常勤講師を取り入れても良かったのではないかと推測する。

韋) 臨床現場のセラピストに来てもらうという意見もあったが、実現はしなかった。

杉町) 理学療法学科は、関節モビライゼーションとか神経筋促通療法などの内容で講師に来ていただいたが、例年のように演習出来ていない印象である。

韋) 活水大学などでは、実習に行けない学科での学内演習はどのようにされたのか。

長尾) 制限解除されることを前提に、後期に日程をずらすなどカリキュラムを編成して対応した。

西) 長崎大学の場合、5名だけ学内実習は少し難しいと思う。保健学科のOTでは、他職種連携が学内実習ではできないので、学科全体で看護・PT・OTの現職者にてWeb上での質問などの対応を行った。医技専の5名への対応は長時間でもあり大変だったのではないかと推測する。

韋) 臨床実習中の学生と学内実習の学生の意識の差がでないように配慮したが、結果がどうなのかは見えない。実習後に発表会をしたが、若干知識の差がある感じはした。

長尾) 本当の患者を診るのと、架空の患者では違うのではないかと推測する。

松本) 実習に行けなくなる可能性はこれからもあり得る。今回は5名だけ学内実習で、1対1で教員が付いたとのことだが、どのような形だったのか。

岩永) カリキュラムは1日4コマであり、各コマにテーマを設定し教員が分担して入った。指導者役の教員は、挨拶・素行などの人間性を育てる視点を持ち、技術的内容の指導を行った。

松本) 疑問に思ったのは、臨床との格差(内容の違いなど)があるか、5名の学内での中骨が均一化していたのかという点である。

岩永) 5名については共通の講義・演習を行っており、個別のフィードバックと組み合わせて行っている。そのため、学内に残ったことを悔やんでいる学生はおらず、密に指導を受けてよかったなど前向きな反応があった。

実習前には保護者に連絡を取り、臨床に準じて取り組むことの説明を行った。その中で保護者からは学生の状況を踏まえて学内での指導で安心したなどの意見もあった。

韋) 学内実習者の選出には担任も随分悩んだようである。今回の対象者は、学内で基礎部分をじっくり取り組めたという点では成功につながったという印象がある。

松本) これからも同様のことがあり得ると考えた時に、コアの項目をある程度決め、ある程度の均一化が図れるようにマニュアルを作るとよいのではなかろうか。

岩永) 今回は3週間だったので、開始前に時間割を組み、分担も決めた。統合と解釈の評価実習だったので、模擬的にはセッティングしやすい状況であった。しかし3年生の実習になれば、治療的な内容の見学と体験になるので、オンラインで行けるのかという疑問がある。なので、何とか医療機関の理解を得て臨床実習に臨ませたいというのが本音である。

松本) 先ほど、学内実習でヒアリングを行う話があったが、他の学生はやらずに実習に向かうのか。

岩永) 実習直前に、総合学習の中でコミュニケーションや評価の確認など概要については実施している。もちろん今回学内実習の学生も参加している。そのうえで学内実習は臨床を意識して取り組んだ。今回の学生については、成績で判断したのではないことはお伝えする。

韋) 重工記念長崎病院での受入れ状況はどのような状況か。

有福) 玉成高等学校の看護学生は受け入れていた。今年の実習は受け入れないと決まったときに、各養成校の受け入れを断った。そのため玉木学園系列であっても受け入れはできない。今まで県外を含め10校ほど受け入れていたが、来年度以降については県内の養成校のみを受け入れる方向である。

大坪) その決定はリハビリテーション科で行うのか。

有福) 今回の受入れ中止は、新型コロナウイルスの影響を鑑みてリハビリテーション科で決定した。感染症専門の看護師もおり、実習受け入れに関しては厳しい方である。なぜ看護学生を受け入れたのかは不明である。短期の見学実習だったためなのかとも考えられるが。

韋) 4月からでも受け入れていただければ助かる。

養成施設等の対応(抜粋)について、あまり詳しくは載っていないが、気になることはないか。学内で行ったことが本当に認められるのかも疑問であるが、詳しいことはわからない。

杉町) 今回実習地の確保をするためにかなり苦労した。本来登録済みの施設でないと配置できないが、弾力的に取り扱って差し支えないと示されていたので、新規施設にもお願いした状況であ

る。

大坪) 今年度の1年生から指定規則が改定されて、『臨床実習指導者研修を受けたセラピストでないと受けられない』とされているが、見学実習もその条件が当てはまるのか。長期実習についての研修会でも質問したのだが、研修を受けた指導者がいる上で、研修を受けていないセラピストに見学に行くことはダメだという回答だった。それを踏まえて、1年生の見学も資格が必要だと解釈した。

韋) 見学実習に関しては、『見学』なので資格要件は満たさなくても良い。模倣・実践へと進んで行く実習では資格を満たす必要がある。

杉町) 1年生の見学実習については、5年以上の経験を有するセラピストにみていただくようお願いしている。

韋) PT県士会では今年度の研修会が実施できておらず、11月に規模を半分にしている予定である。研修を受けた者の数は足りない状況であるので、協会が国に制度運用の延長等を依頼したそうだが、認めるという話は聞いていない。

長尾) 他校も同様な実習の取り組みを行っているのか。

岩永) 先日行われた九州リハビリテーション学校連絡協議会(オンライン会議)の中では、福岡ではほとんど出来ていないとのことで、教員の持ち回りや、外部講師から患者情報を動画等で提供していただくオンライン演習や学内演習で対応したというケースもある。グループを組み、各領域の疾患をローテーションで取り組む形で対応している所もある感じである。DVDを作ることを提案した養成校もあったが、具体的には本校が取り組んだ内容に近いものであったようである。

長尾) ということは、ある程度認可せざるを得ない状況であるということ。

先生方は通常の一定の持ちコマがあるわけで、それにプラスすることになるので業務内容が増えている。手当て等については学校の考え方ではあるが、教員の労力を考えなければならないのではないかな。

韋) 外部からの講師を増やすなど検討していただきたい部分でもある。

岩永) 今回の学内実習では、不足がないように配慮して取り組んだつもりである。

長尾) 先生方も勉強になると思う。大学のカウンセリング技法でも大学院の学生にクライアントになってもらい臨床感を出して面接を実施することも取り組んでいる。教員側も勉強になった。

韋) 5名を通して「こんなにも分かっていなかったのか」ということが見えてきた。他学生の中にもいるのではないかなと思われる、今回の学内実習の取り組みが、実習前の対策にも活かせないかなとも考える。

分部) 長崎大学医学部の解剖実習は例年の半分くらいの実施か。

西) ほぼ半分くらいである。歯学部については例年通りの実施である。

分部) 解剖実習と臨床実習では違いがあると思うが、時間というものが色々なことを獲得する上で必要になる。その点では学生には可哀想だったという感じがある。

韋) 夏に長崎大学で解剖標本見学実習を行わせていただいているが、今年は出来なかった。保護者の中には、少しだけでも今年度中にできないかとの意見もあったが厳しい状況なのか。

西) 現状はすべて断っている状態であり、厳しいと思われる。

韋) 色々な経験が少ない状態で卒業していくことになり、就職してどのような影響が出るかも心

配である。就職後にいろいろなことが起こってくるときに、メンタルヘルスも含めて影響が出てくるのではないかという話もある。

大坪) 和仁会病院では、今年度実習ができていない学生がいることを見越して、次年度入職の新人に対する指導方法を検討している。今までも新人教育プログラムがあったが、それに加えて実習に近い状態で、教育者を付けて見学・模倣・実施の流れを一定期間取り組む指導体制を教育委員会で組み立てているところである。

有福) 重工記念長崎病院はこれまで新入職員数が少ない状況だったので、プログラムはなかった。今年2名入職したが、指導係が1名付き二人組で患者様を診る形式をとり、フィードバックをしながら進めていく状況である。来年度は強化する必要があるのかとも懸念する。

韋) 求人する上で、実習を経験した学生とそうでない学生での違いはあるのか。

大坪) 実習の経験はアピールポイントにはなるかもしれないが。

有福) 人柄等が重要となってくるので、あまり影響はないと思われる。

松本) 5月から授業が始まったときに、ちょうどロスジェネレーション世代が主人公である半沢直樹のドラマが放映されていた。1年生に「君たちはコロナ禍のジェネレーションだ。卒業式も入学式もなく、色々なことができなかった世代が進学していく状況である。そのため、モチベーションをなくす子どもたちがいるのではないかということが懸念される。現在コロナ禍の影響を受けた世代がここ数年就職していくことになるので、学校もきちんと対応しなければならないと思う。ジェネレーションロスの問題はずっと以前からあった。半沢直樹のセリフに世代間の『ある・なし』は皆あった、ないからといってめげてはいけない。」という話をした。来年になっても出来ないことが出てきてめげてしまうのではないか。東京の大学でもすべてなしになり、授業もオンラインになり毎日ディスプレイだけで勉強する状況になり大問題になっている。なので実習の問題だけでなく、学年としての塊として取り組む必要があると思う。

対策として空間を広く取ることにより、板書やスクリーンが見えづらいなどの授業環境にもロスが生じている。「あれなかった、これなかった」という学生が増えてくることを加味すべきである。

韋) できるだけモチベーションが落ちないような環境を整えて、将来が絶たれることがないように努力していきたいと思う。

7. 総評・謝辞

分部) 臨床の先生方のご意見を参考に、教員が計画していけるのではないかと考える。松本先生が話されたように、問題が1年生に起きているケースがある。最近の子どもの性質として相談せず結論を出す傾向もあるようである。しっかりと気を付けて教育していきたいと思う。

8. 閉会

韋) これをもちまして、令和2年度第1回教育課程編成委員会を閉会する。